

# 僕らの使命

多摩市立聖ヶ丘中学校 2年 山口 佳樹 やまぐち よしき

あなたはもし「行ってきます」「行ってらっしゃい」の挨拶が最後となってしまったら？  
当たり前前に学校、仕事へ行き「おはよう」「また明日」と言える日常生活が突然終わりを迎えたら？  
大半の人はあり得ないと思っているでしょう。しかし、今世界ではあり得ないと思っていることが現実起きています。そして一歩判断を間違えると、私達にも戦争という魔の手が伸びている状況なのです。

80年前。広島では人類史上初となる原子爆弾が投下されました。さく裂した爆弾により、強烈な熱線、放射線が放出され爆風が吹き抜けました。街は血まみれ、原型をとどめないほど黒焦げの死体、瀕死の人々で埋め尽くされ、沢山の人が苦しみながらこの地で息を引き取りました。80年が経ち、復興したように見える今でもたった1つの爆弾がもたらした苦しみが終わる事はありません。

今回、広島派遣事業の中で、僕達は胎内被爆を経験された二川さんから直接お話を伺う機会がありました。二川さんは、お母さんのお腹にいるときに放射線を取り込んでしまい、様々な健康被害に悩まされ、それだけではなく、被爆による差別にも悩まされたと言っていました。人には言えない辛さを抱えることは、どれほどの苦しみだったのでしょうか。

平和記念資料館で見た様々な遺品には痛い、辛い、怖い・・・という一人一人の悲しくて残酷な別れ、苦しみも残されており、ひと言では言い表せない、なんとも言えない感情になりました。資料館の待合室でガックリと肩を落とす外国人の姿も目に焼き付いています。

我々や、我々の親世代、更には祖父母世代、時代が進み、戦争を知らない世代が大半となっている今、自ら知ろうとしない限り、戦争の悲惨さを知る機会はありません。海の方へではなお行われている争いについても、どこか他人事として捉えているのではないのでしょうか。

実際、ニュースのインタビューに答える自分と同世代の人が終戦記念日を聞かれ、答えられない・・・というとても残念な現状を目の当たりにし、強い危機感を感じました。

核兵器は地震、台風、噴火等の自然災害とは違います。思い通りにならないからと、生活を終わらせるための脅し文句として使って良い武器ではありません。争いは深い悲しみ、憎しみを生むだけ。明日が保証されない未来があってははいけません。

平和は全員が同じ方向を向いてこそ生まれるもの。文化、個性を認め合い、相手の気持ちや考えを知ること、共感すること。思いを伝え合い、皆で協力し、支え合うこと。夢や希望に溢れた未来を一人一人が創らないといけません。

では、僕達8名の「使命」とは何か。

今回の広島派遣事業では自分の命を大切に、次の世代へ、世界の人々へ、平和のバトンを繋ぐことを学びました。

旅はこれで終わりではありません。これから先、戦争の恐ろしさを知らない、知る機会がない人々に私達は未来を考えてもらうきっかけの場を創る必要があります。

過去は変えられませんが、未来は今からどんな形にも変える事が出来ます。小さなコミュニティから国境を越えて世界へ、平和の大切さを伝えていきたいです。